

139 へびつかこふん 蛇塚古墳



指 定 市 史 跡 昭和47年 5 月5日
 所在地 白 田
 所有者 佐 久 市



白田地域に所在する63基の古墳中、千曲川左岸に存在する古墳は10基を数えるのみである。蛇塚古墳は、千曲川左岸の平坦な沖積地に立地し、北西側には、縄文、弥生、古墳、奈良～平安時代の蛇塚遺跡が展開している。

昭和61年（1986）、長野県考古学会員・町文化財調査委員を中心として石室の調査が実施され、古墳の規模および構築年代等がほぼ明らかになった。

墳丘径10m、高さ2.5mを測る円墳で横穴式石室の構造を有し、やや地下に掘り込んで玄室を築いた様相を呈している。玄室の規模は、4m×2.8m、高さ1m、羨道は長さ1.9m、幅1.2mを測り、ほぼ原形をとどめている。また、玄門および羨門も残っており、玄室～羨道～羨門までかなり良好な遺残状態を示している。玄室の床面は河原石が敷かれ、その直上から骨や副葬品が出土した。骨は主に奥壁付近、鉄鏃・その他鉄製品は玄室入口付近の左右の壁際、蕨手刀、直刀は左側の壁際からサヤに納まった状態で出土したが腐蝕が著しく進んでいる。また、骨が鑑定の結果火葬骨と判定された。玄室は、6個の巨石で生まれ、全て角の丸い千曲川から運んだと考えられる安山岩を使用し、天井石は東山の溶結凝灰岩、羨門は流紋岩を使用している。

古墳の構築年代は、出土遺物から古墳時代末から奈良時代に築造されたと考えられる。蕨手刀は7～8世紀に日本で行われた砂鉄精錬によって作られた反りを持つ刀である。長野県下では7地区から出土しているだけであるが、白田では英田地畑古墳と当古墳の2古墳から出土しており、東山道との関係も考えられている。